

相嶋氏と同じ進行性の胃がんで闘病中のものとして一言コメントいたします。

本日、私も告発および記者会見に参加の予定でしたが、血液検査の数値が悪く、急遽、造影CT検査を行うことになりましたので、書面にて、一言、記者の皆様にお伝えいたし
たく思い、筆を執りました。

告発状にあるように、私もヘモグロビン濃度が正常の半分以下という数値が出て、緊急の輸血を受けました。その2日後に改めて数値を図ったところ依然として正常値を大幅に下回っていたため、その場で緊急入院となりました。

相嶋氏は明らかな貧血所見が認められていながら輸血は3日後というのは到底信じられません。私の場合は、自宅の2階への階段の上り下りすら困難で、病院へ行くバス停であまりのふらつきに道路にへたり込んだほどです。それを考えれば、輸血までの3日間の相嶋氏の辛さは想像に余ります。

おそらく、食欲不振から栄養状態も悪化していたのではないか。私の場合は、緊急入院で輸血を持続したと同時に、鼻からチューブを挿入して栄養剤注入する経鼻胃管の処置を施しました。

術前の2週間、術後10日間にわたりチューブによる栄養補給は続きました。この間、口から入るのは水分だけ。

ほぼ9時間にもわたる腹腔鏡手術によりがんは取り除けたものの、リンパ節への転移が見られるため、ステージ3Bと診断されました。現在、抗がん剤による再発予防の治療中ですが、入院から手術までは体力の回復を待ったとはいえ2週間ほどでした。

それに比べ、相嶋氏は2020年8月28日に胃痛やふらつきなどの症状を訴えて以来、勾留執行停止による入院・検査まで適切な治療を受けることもままならず、ほぼ2ヶ月も放置されていました。最終的に手術不可と診断されているので、他臓器転移の可能性大のステージ4ではなかったでしょうか。死の危険は、放置されていた2ヶ月の間に、かなり深刻な状況になっていたのではなかったかと推察します。

進行性がんでは、一刻も早い手術とそれに伴う治療が必要となることは、医師ならば当然熟知しています。おそらく、相嶋氏の容態について医師からのサゼッションが検察にもあったはずです。それを無視しての保釈請求却下は、まさに人倫にもとる行為と言わざるを得ません。

結果として相嶋氏を死に至らしめた検察の責任は、単なる謝罪ではなく法廷の場で明らかにする必要があるのではないか。どうぞ